

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 7 日現在

機関番号：32675

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2013

課題番号：24652041

研究課題名(和文) 古代東アジア音楽の検証可能な「再生」へ向けて 解読から鳴り響く音楽への過程

研究課題名(英文) Towards a verifiable 'reproduction' of the music of ancient East Asia: From decipherment of old notations to music for performance

研究代表者

Nelson Steven (NELSON, Steven)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：60326171

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円、(間接経費) 480,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、8から14世紀にかけて成立した東アジアの古楽譜について、研究代表者自身の長年の古楽譜解読研究の成果を中心に、現行雅楽や復元された楽器の奏者の「経験知」を加え、学術的に実証できる「再生」を目指す。古楽譜の解読に始まり、鳴り響く音楽へと至る筋道を、検証可能な形で明らかにし、その成果を2つのレクチャーコンサートという形だけではなく、解説付き聴覚資料としても記録を残そうとするものである。

研究成果の概要(英文)：This research project has aimed for a methodologically verifiable 'reproduction' of ancient music notations from East Asia of the eighth to fourteenth centuries, combining the results of scholarly research on and decipherment of the notations with the experiential knowledge of performers of traditional and reconstructed instruments. Its results have been presented in the form of two lecture concerts, and in the ongoing publication of finalized recorded versions with the necessary documentation of the methods employed.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：東洋音楽史 雅楽 唐楽 復元 復元楽器 経験知 鴨長明 秘曲尽くし

### 1. 研究開始当初の背景

この数 10 年間、日本では古代東アジアの古楽譜をめくって、その研究者と、「復元」を行う演奏家・作曲家との間の乖離が甚だしい。古代音楽の「復元」におけるこうした「理論と実践」の乖離は、筆者（研究代表者ネルソン）が初めて来日した 1980 年当時すでに生じていた。戦前から 1970 年代にかけて古楽譜研究の第一人者であった林謙三（1899-1976）の『雅楽 古楽譜の解説』（1969）は画期的な業績だったが、林が研究成果の一部を聴覚資料、解説付きレコード『天平・平安時代の音楽 古楽譜の解説による』（1965 年）に残したのは、こうした乖離がまだ決定的でなかったことを物語る。林のあとを受けて唐楽に関する特に優れた研究成果を残しているのは寺内直子（1960-）と遠藤徹（1966-）で、両氏の研究活動により平安時代の唐楽の特徴、特にリズムと調性の在り方がかなり明らかになった。しかし、その成果が舞台上の「復元的」演奏に反映されることはこれまであまりなかった。

一方、1970 年代以来国立劇場を中心に行われてきた「復元的」演奏の復元作業は、学術的な研究を行わない演奏家兼作曲家、芝祐靖（1935-）にほぼ委ねられてきた。古代の音組織（特に音階）を意識した初の「復元」は芝の《曹娘禪脱》（1981 年）であり、客席にいた筆者は感動と共に、解説から音楽として鳴り響かせるまでの手順に対して学問的な疑問を感じた。その後国立劇場では「伶楽運動」の名の下で、正倉院などの古代楽器の復元品が 10 数種類造られ、芝の「復元」曲と、現代作曲家による復元楽器のための新作とが演奏されていった。残念なことに唐楽の研究者の意見が取り入れられることはなかったが、国立劇場の力で優れた古代復元楽器が造られ、それらを演奏してきた、豊富な経験を持つ楽器奏者が今現在各方面で活躍している。

古代音楽の「復元」にかかわる日本国内のこうした研究や演奏とは別に、海外でも重要な動きがあった。1950 年代から隋・唐の音楽文化に関する研究を発表し始めた英国ケンブリッジ大学のピッケン Laurence E. R. PICKEN（1909-2007）は、1970 年代から博士課程学生を中心にした研究グループを組み、唐楽の古楽譜に関する研究を進めた。筆者はオーストラリアのシドニー大学でそのメンバーの 1 人、マレット Allan MARETT（1949-）の下で勉強した後、1980 年に来日した。以来、日本で東アジアの古楽譜の文献学的研究や解説研究、音楽図像学や古典文学における音楽などの隣接分野の研究を行ってきたが、30 余年経って漸く、古代音楽の「復元」に必要な知識と視野の広さが身についたと感じ、この研究課題に挑むことにした。

### 2. 研究の目的

本研究は、日本における上記の現状を打破

するために、筆者自身の長年の古楽譜解説研究の成果に基づき、現行雅楽や復元された楽器の奏者の「経験知」を加え、学術的に実証できる「再生」を目指す。古楽譜の解説に始まり、鳴り響く音楽へと至る筋道を、検証可能な形で明らかにし、その成果を解説付き演奏会（レクチャーコンサート）という形だけではなく、解説付き聴覚資料（CDブックなど）としても記録を残そうとするものである。

### 3. 研究の方法

従来の「復元的」演奏で最大の問題は、解説から得られた結果を鳴り響く音楽として成り立たせる上で、「復元」の担当者が何を加えているかが明らかでないことである。時間芸術、聴覚芸術である音楽は、時間の流れの中で渾然一体のものとして知覚される。考古学的な遺物、例えば壺などの復元の場合、発掘された実物の断片と、それを補って完全な壺の形にするために知識に基づいた想像の力を借りて加えられた部分は、それぞれ明確に識別し得る。「音」が素材の場合、「実物の部分」（根拠となった楽譜資料を解説して得られたもの）と「想像による部分」（鳴り響く音楽として成り立たせるために加えられたもの）とを、同一の時空間内で捉えることは不可能である。識別可能なものにするためには、実証性・具体性の高い解説を加えるなり、演出法など演奏自体を工夫する手段を講じなければならない。「解説」という科学的実証の延長線上に「復元」あるいは「再生」を置こうとするならば、同じ実証性を保証しなければならないのである。

本研究では、4 段階から成るプロセスを採用した。すなわち、解説の結果得られたもの（音高と相対的な長さを持った音列）を、事前の打合せの場で楽器奏者に提示し、筆者の知識・知見と奏者の経験知とを照らし合わせながら演奏する内容（演奏用楽譜）を決めていく。演奏の際には、反復や楽器編成その他の演出法の工夫で識別を可能にする。一度演奏を試みてから、改めて奏者と相談の場を設け、相互的フィードバックを参考に楽譜の調整を行う。最終的な調整の結果を録音して、聴覚資料として保存し、発信に備える。

今回は、下記「研究成果」で詳述するように、上記のプロセスを 2 回、1 回は完全に、1 回は途中まで行う事ができた。そのため、当初の計画よりも多くの聴覚資料を記録として残すことができ、より充実した成果物の制作が可能になる見込みである。演奏に際して協力を依頼したのは、2 回とも東京に本拠地を置く雅楽演奏団体、伶楽舎であった。1985 年に設立されたこの団体は、現行雅楽以外に、正倉院復元楽器を用いた演奏にも積極的に取り組んできたので、メンバーは現行雅楽器のみならず、復元楽器の経験も豊富に有している。今回、その経験こそが好結果をもたらしたと筆者は考えている。

#### 4. 研究成果

(1)二松学舎大学の磯水絵教授の依頼を受けて、2012年12月15日に同大学九段校舎で開催された『方丈記』成立800年記念シンポジウム&コンサート「今日は一日、方丈記」の第3部、「秘曲尽くし」再現『文机談』に見える秘曲を聴く」における秘曲の復元試演を行った。「秘曲尽くし」事件は、鴨長明が世捨て人となったきっかけの一つだったともいわれるが、要点は次の通り。箏・琵琶を善くする教奇者だった長明は、ある時、著名な音楽家を賀茂神社の奥まった所に呼び集めて、当時最も大事にされていた歌や器楽曲の会を催した。あまりの素晴らしさに堪えかねた長明は、伝授も受けていない琵琶の最秘曲《啄木》を数回繰り返して弾いた。このことが当時の琵琶道の宗匠、藤原孝道の耳に達し、後鳥羽院へ訴えられた結果、長明は京都を去ることになったという(『文机談』)。

今回は「秘曲尽くし」の際に演奏された器楽曲を中心に、他の琵琶秘曲を加え、全部で9曲の復元試演を行った。

律の部 箏《小調子》、笙《平調入調》、  
琵琶《大常博士楊真操》、箏《千金調子》  
呂の部 琵琶《石上流泉》・《上原石上流泉》、  
箏《由加見調子》、琵琶《啄木調》、  
竈笛・箏・笙《(陵王)荒序》

復元試演へ向けての作業は、上記の研究方法に従って、筆者が用意した古楽譜の解読結果を、事前の打合せの場で4名の楽器奏者(箏の田淵勝彦、竈笛の谷内信一、琵琶の中村かほる、笙の中村華子)に提示し、筆者の知識・知見と奏者の経験知とを照らし合わせながら演奏内容を決めた。コンサート当日は筆者の解説と、筆者(箏担当)を含めて5名による復元試演を行い、映像記録も採った。

後日、演奏内容について改めて打合せを行い、同会場で録音を行った。相談の結果、《荒序》に太鼓を加えることになったので、伶楽舎の宮丸直子が演奏に加わった。音源編集・マスタリング作業及びCDプレス原盤の作成を依頼し、CD製造に備えた。また、一般読者のための解説(選曲と曲順について、楽譜の解読と「再現」の方法について、各曲の曲目解説と関連説話紹介)を用意した。CDと解説は、催し全体を記録する図書(磯水絵編『今日は一日、方丈記』)の一部として、2013年10月に新典社より出版された。こうしたCD付録の出版は、編者が「刊行にあたって」で述べている通り、日本古典文学の世界では「画期的なこと」であった。

CDの各トラックの内容は次の通り。

##### 律の部

- |   |             |        |
|---|-------------|--------|
| 1 | 箏《小調子》      | 2分42秒  |
| 2 | 笙《平調入調》     | 10分50秒 |
| 3 | 琵琶《大常博士楊真操》 | 3分36秒  |
| 4 | 箏《千金調子》     | 2分11秒  |

##### 呂の部

- |   |            |       |
|---|------------|-------|
| 5 | 琵琶《石上流泉》   | 5分    |
| 6 | 琵琶《上原石上流泉》 | 2分27秒 |

- |    |               |       |
|----|---------------|-------|
| 7  | 箏《由加見調子》      | 1分54秒 |
| 8  | 琵琶《啄木》        | 6分58秒 |
| 9  | 竈笛・箏・笙・太鼓(合奏) |       |
|    | 《荒序》一帖        | 1分8秒  |
| 10 | 同《荒序》二帖       | 46秒   |
| 11 | 同《荒序》三帖       | 1分4秒  |
| 12 | 同《荒序》四帖       | 1分    |
| 13 | 同《荒序》五帖       | 1分42秒 |
| 14 | 同《荒序》六帖       | 1分16秒 |
| 15 | 同《荒序》七帖       | 1分15秒 |
| 16 | 同《荒序》八帖       | 54秒   |

今回採った研究方法が特に力を発揮したのは、琵琶秘曲の復元試演においてであった。平安時代末成立の琵琶楽譜集成『三五要録』(藤原師長撰)所収の楽譜に基づいて復元試演を試みたところ、4曲が共通に持っている音楽的特徴、すなわち音楽形式の整った旋律が8単位から成るリズム・サイクルの中で繰り返し広げられる構造がはっきりと現れた。これまで琵琶秘曲の復元は林謙三(LPレコード「琵琶 その音楽の系譜」1975年)や東京楽所(CD「平安朝の殿上人の秘曲」1992年)によって公にされているが、ともに現行雅楽の演奏様式を採用した非常にゆっくりしたテンポの演奏のために、そうした特徴を耳で認識することは困難であった。今回の琵琶4曲の復元試演を契機に、他に多く古楽譜に残されている琵琶独奏曲に同様の特徴があるか否か、その全貌について具体的に検討する必要があると痛感し、次の研究課題に設定した。

さらに、4段階から成るプロセスの結果、レクチャーコンサートの際に未だ問題が多い感があつた最秘曲《啄木》について解決を導き出すことができた。奏者の中村かほるとの再度の打合せの際、楽譜と口伝を書き留めた中世の楽書の検討により《啄木》に特徴的な「三種の音(こえ)」「キツツキをモチーフとした3つの効果音、すなわち「啄木之音」「下食之音」「鳴飛之音」への新しい解釈を提示することになった。なお、これらの特殊奏法のうち、音のほとんどない動作(作法)も重要な要素となっているものがあるので、より完全な記録を残すには映像化が必要である。これも今後の課題としたい。

また、笙の秘曲《平調入調》の演奏用楽譜を用意するには奏者の中村華子の経験知によるところが多かったが、蘇ったその音声はたいへん魅力的で、調性においても形式においても現在の演奏伝承で見られなくなった特徴を有していることがわかった。

(2)古楽譜の解読の結果を舞台上で鳴り響く音楽として再現する2つ目の試みは、唐代伝来の音楽の合奏を中心に、辺成雄博士記念第1回東洋音楽史研究国際シンポジウム「唐代音楽の研究と再現」(主催上野学園大学日本音楽史研究所、於上野学園大学、2014年3月6・7日)にて実施した。

本シンポジウムは、初日に筆者の公開講演を含め公開講演4件、2日目に研究発表7件、

及び筆者が構成・解説を担当したレクチャーコンサートが行われた。海外の研究協力者として招聘した趙維平（上海音楽学院）には公開講演（「岸辺成雄の唐代音楽史学研究の成果が中国に与える影響」）を、また同じく招聘した呉国偉（香港理工大学香港専上学院）には研究発表（「岸辺成雄の調子研究 主に『隋書』における鄭訳の説明について」）を依頼した。その他中国人研究者による研究発表が2件あった。

「唐代伝来の音楽とその再現」と題する初日の筆者の公開講演では、レクチャーコンサートの内容について、取り上げた曲の再現へ至る研究方法及び作業過程について論じた。レクチャーコンサートでは伶楽舎他14名の演奏者の協力を得て、次の曲を取り上げた。併せてライブ録音における経過時間と、取り上げた理由を記しておく。

#### 1 《宗明楽（破）》

- 1-1 二重奏（五絃琵琶、横笛）2分40秒
- 1-2 三重奏（横笛、琵琶2面）4分12秒
- 1-3 管絃編成による合奏 3分57秒

中国から日本への唐楽伝承の継続性を具体的に示すために、異なった時代を設定しながら盤渉調曲《宗明楽》の復元試演を行った。まず、『五絃譜』（8世紀か9世紀初頭成立、唐の演奏伝承を記録）と『博雅笛譜』（966年）による、五絃琵琶と横笛の二重奏で、1世紀年以上の隔たりがあっても基本旋律がほぼ同一であることを示した。次に横笛の旋律に『三五要録』（12世紀後半）所収の、異なる調絃による2種の琵琶パートを加えて、旋律がほぼ同一であり、また笛の基本旋律に装飾音を加えた程度のものであることを示した。最後に、平安院政期、12世紀初頭頃を想定した、管絃編成による復元合奏を行った。複数の古楽譜を参照し、様式の統一を図った。

#### 2 正倉院の琵琶譜断簡『天平琵琶譜』

- 2-1 《黄鐘調緒合》（独奏） 1分13秒
- 2-2 《黄鐘調二手》（合奏） 3分32秒

日本で書写された最古の楽譜である『天平琵琶譜』（747年以前）に記されているのが、「黄鐘」（コウショウ）を主音とする音階による《番仮崇》（芝説）でなく、「黄鐘調」（オウシキショウ）という琵琶調絃による琵琶独奏曲《黄鐘調二手》の、伝来の早いバージョンであることを具体的に示すために、『天平琵琶譜』の「調」以下の部分と、『南宮琵琶譜』（921年）の《黄鐘調律音》、及び『三五要録』（12世紀後半）の《黄鐘調二手》との同時演奏を試みた。『天平琵琶譜』の前半（「調」までの部分、琵琶黄鐘調の《緒合》か）の独奏を前奏とした。

#### 3 《三台急》とその唱歌／声歌

- 3-1 管絃編成（歌なし） 3分25秒
- 3-2 唱歌入り 3分25秒
- 3-3 極楽声歌 3分33秒

奈良・平安時代の古楽譜に記されているのが旋律の「骨格」ではなく、当時演奏された旋律そのものであることを、筆者の近年の論証

に基づいて「実演」した。まず、平安院政期、12世紀頃を想定した、管絃編成による復元合奏を行った。次に『知国秘抄』（藤原孝道著、1229年）に記録されている唱歌を、琵琶の旋律に合わせて加えた。最後に、その唱歌を鎌倉時代に遡る「極楽声歌」（唐楽曲、この場合は《三台急》に西方極楽を讃歎する歌詞を付けたもの）の博士譜（声楽譜）2種を解説した旋律に置き換えた。唱歌と「極楽声歌」の旋律の基本的同一性から、これが平安・鎌倉時代の人々が旋律（孝道の表現を借りれば「楽のこゑ」）として認識していたものであることを立証した。

#### 4 『敦煌琵琶譜』より《西江月》

- 4-1 歌曲《西江月》 2分25秒

日本伝存の楽譜資料以外に、20世紀初頭中国の敦煌で発見され、現在パリ国立図書館に保管されている『敦煌琵琶譜』（933年以前）がある。最近の研究成果によれば、その内容は日本に伝えられて日本雅楽の「唐楽」となった隋・唐の宴饗楽の系統ではなく、宋词の前身に相当する歌曲の伴奏譜である可能性が高く、今回は歌曲としての解釈を、ピッケンらの研究に基づいて紹介した。

#### 5 『五絃譜』より《上元楽》

- 5-1 第一 3分19秒
- 5-2 第二 3分14秒
- 5-3 第三 3分9秒
- 5-4 第四 3分5秒
- 5-5 第五 3分
- 5-6 第六 2分44秒

『五絃譜』には6楽章から成る《上元楽》という曲がある。これは、玄宗皇帝の在位中（712-56）に制定された「二部伎」の「立部伎」8曲の1つで、高宗上元3年（676）、天地の郊祀や廟祭のために作らせた文舞と同名曲である。本来は舞者80人の伴奏に必要な大編成だったと考えられるが、今回は唐で影響が強かった亀茲楽の特徴的な楽器を極力含めるようにした。通常の唐楽合奏に、五絃琵琶、箏篋、排簫、及び今回初めて復元された羯鼓を、玄宗皇帝の時代を想定した復元合奏に加えた。

《上元楽》の復元の典拠として使用できたのは、『五絃譜』所収の楽譜のみであった。作業は結局、五絃琵琶の旋律線から「基本旋律」を抽出し、それをヘテロフォニック（）な合奏へと書き換えることであった。[ヘテロフォニック（形容詞）ヘテロフォニー（名詞）。合奏の中で同時に進行する複数の声部が、それぞれに装飾・変形された同一の旋律から成ると認められる音楽をいう。アジアの古典音楽に多くみられる。]

合奏への書き換え作業は各楽器の演奏法についての広い知識を必要とするが、演奏伝承が途絶えた楽器の場合、難しい面がある。今回は、箏篋が特に問題になった。箏篋の調絃法に関する記録が存在しないため、筆者は唐の音階理論に基づいた提案をするしかなかったが、楽器の構造上さまざまな制約があ

って、最初の提案は非現実的と判明した。結局演奏者とその協力者の経験知を借り、実用的な調絃法を提供してもらうこととなった。

また、初めて復元された羯鼓に関しては古楽書類に簡素な楽譜と奏法に関する記述があって、それを部分的に活かせることができた。楽器の「打つ」動作について問題はなく、音も効果的であったが、「摺る」動作を用いていかに効果的な音を出すかが課題として残った。

当日は映像・音源の記録を撮り、現在、レクチャーコンサート後の打合せと録音に向けて内容検討を行っている。録音スケジュールは現時点では未定だが、レクチャーコンサートの再演が予定されており(2015年5月、於浜松市楽器博物館)、その前後に機会があると目論んでいる。また、2014年8月、奈良教育大学で開催される国際学会にて本研究に関する研究発表を行うことが確定している。

最後に、演奏に際してご協力頂いた伶楽舎他の奏者の氏名を列挙する。石川 高(歌・太鼓・鞆鼓)、岩亀 裕子(排簫)、田淵 勝彦(琵琶・歌・太鼓)、角田 眞美(横笛・竜笛)、東野 珠実(笙)、中村 かほる(琵琶)、中村 華子(五絃琵琶)、中村 仁美(篳篥)、野田 美香(箏)、三浦 礼美(笙)、宮丸 直子(鞆鼓・碰鈴・羯鼓)、八百谷 啓人(鉦鼓・歌)、八木 千暁(琵琶・歌)、李 小艾(歌)。

なお、以上、便宜上「復元」「復元試演」「再現」といった表現を使ってきたが、厳密に言えば、遺物(例えば正倉院の楽器)は復元できても、一度消えてしまった音楽は完全な「再現」という意味での「復元」は不可能である。そこで、比喩的な使い方だが、本研究の研究課題名には「再生」という表現を使用した。楽譜の「再生」には、楽譜の譜字を音高と相対的な長さを持った音列に置き換えただけの「文字通り」のもの、一部に演奏慣習や装飾音を加えたもの、現行の演奏様式によるものなど、様々な可能性があるため、より適切ではないかと考えたからである。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

Nelson, Steven G., Issues in the interpretation of notation for East Asian lutes (*pipa* / *biwa*) as preserved in scores of the eighth to twelfth centuries. 『日本音楽史研究』第8巻、2012、巻末1-41(査読有)

[学会発表](計5件)

Nelson, Steven G., Towards a verifiable 'reproduction' of the music of ancient East Asia: From

decipherment of old notations to music for performance, ICTM MEA 2014 NARA (国際伝統音楽評議会東アジア研究会第4回シンポジウム)、2014年8月22日、奈良教育大学(奈良県)

スティーヴン・G・ネルソン、伶楽舎他演奏者14名、レクチャーコンサート「唐代伝来の音楽とその再現」、岸辺成雄博士記念第1回東洋音楽史研究国際シンポジウム「唐代音楽の研究と再現」、2014年3月7日、上野学園大学石橋メモリアルホール(東京都)

スティーヴン・G・ネルソン、公開講演「唐代伝来の音楽とその再現」、岸辺成雄博士記念第1回東洋音楽史研究国際シンポジウム「唐代音楽の研究と再現」、2014年3月6日、上野学園大学石橋メモリアルホール(東京都)

シンポジウムの資料集に和文[64-80]及び中文[挟み込み11頁]を掲載

スティーヴン・G・ネルソン、古代東アジア音楽の検証可能な「再生」に向けて 鴨長明の「秘曲尽くし」再現を振り返る、比較人文学先端研究特別演習公開研究集会「中世音楽・音声の世界像」、2012年12月23日、名古屋大学文系総合館(愛知県)

スティーヴン・G・ネルソン、伶楽舎演奏者4名、レクチャーコンサート「秘曲尽くし」再現 『文机談』に見える秘曲を聴く、『方丈記』成立800年記念シンポジウム&コンサート「今日是一日、方丈記」 鴨長明の「心」を読む、2012年12月15日、二松学舎大学九段校舎中洲記念講堂(東京都)

[図書](計2件)

福島 和夫、スティーヴン・G・ネルソン他(共著、他10数名)、和泉書院、題名未定福島和夫先生記念論文集、2014年出版予定(論文[単著]「正倉院文書紙背「琵琶譜」、いわゆる『天平琵琶譜』に関する一考察」)

磯 水絵、スティーヴン・G・ネルソン他(共著、他11名)、新典社、磯 水絵編『今日是一日、方丈記』、2013、224頁(206-222「秘曲尽くし」再現 『文机談』に見える秘曲を聴く)、及び付録「秘曲尽くし」再現 演奏CD監修を担当) ISBN978-4-7879-0633-5 C0095

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

ネルソン スティーヴン(NELSON, Steven)  
法政大学・文学部・教授  
研究者番号: 60326171